

ワシントン大学のインド学

一 郷 正 道

The University of Washington の Dept. of Far Eastern and Slavic Languages and Literature には、次のような語学講座が設けられている。Bulgarian, Chinese*, Czech, Hungarian, Hindi-Urdu, Japanese*, Korean, Mongolian*, Polish, Romanian, Russian*, Sanskrit*, Serbo-Croatian, Slavice*, Thai, Tamil, Tibetan*, Turkic, Vietnamese*。(1) このうち教授、学生数からいって隆盛を著わめているのは、やはり Chinese, Japanese, Russian である。

この Dept. の Indic Studies が誕生したのは E. Conze を迎えてのほんの1966年のことである。Indic Studies といっても、その中心となる教授陣や、これまでにインド哲学乃至文化史に関する独立した授業が皆無であったことからいって Buddhist Studies と称した方がふさわしいように思える。佛教学の研究で Ph. D. を取得できるとなったのは、the Univ. of Wisconsin に次ぐ米国では一番目のことであつた。

そして、この "Buddhist Studies" の特色は、(1) E. Conze の存在、(2) チベットの学僧を教授陣に抱えている、という二点に要約できそうである。以下、教授陣の紹介を中心にしてこ

の Dept. の現状を報告し、編集者の御厚意におこたえたいと思う。が、筆者自身滞在期間がまだ短かく、一学生として多忙の故、委細な報告のできない点は御容赦いただきたい。

Edward J. D. Conze, Leon N. Hurvitz, Edwin M. Gerow の三人が Indic Languages and Literatures の Faculty を構成する。

三十三歳当時の E. Conze は、政治的信念であつた共產主義への失望、結婚の失敗等から精神的に失意の底にあつた。その彼をして後半生の人生転換をうながしたものが、鈴木大拙博士の *Essays in Zen Buddhism* との邂逅であり、以後、大拙博士が彼にはカリズマ的存在であつたことは彼自ら告白することである。(2) かかる佛教への入門動機が彼に次のような学問的態度をとらせることになつたのであつた。

The cornerstone of my interpretation of Buddhism is the conviction, shared by nearly everyone, that it is essentially a doctrine of salvation, and that all its philosophical statements are subordinate to its soteriological purpose. This implies, not only that many philosophical problems are dismissed as idle speculations, but that each and every proposition must be considered in reference to its spiritual intention and as a formulation of meditative experiences acquired in the course of the process of winning salvation。(3)

かかる立場にたつて彼は T. V. Murti と同様、中観思想が

最も authentic であり、佛教の central tradition であると考
えている。しかし、関心を同じくする立場にありながら、T. V.
Muti の書には中観派の見解が実に瞑想経験に由来している点
に関する注意が払われていない、と不満をもらし、実践修行の
面をも重視する。

彼の業績⁽⁶⁾については他日、より適任者によって別稿が期せら
れる必要がある。これまで、彼は、膨大な佛教資料を扱うに
際し次のような方法をとってきたことが、永富教授によって指
摘されている。即ち、佛教各学派によってその理解を異にする
ものに焦点を合わせるか、或いは各派に共通するものに焦点を
おいて整理するか、という方法である。そして前者による成果
が *Buddhist Texts Through the Ages* 1954, *Buddhism: Its
Essence and Development* 1957 等であり、後者によるものと
しつ *Buddhist Meditation* 1956, *Buddhist Scripture* 1959 が
あげられる。*Buddhist Thought in India* 1962 は、この分類
にしたがえば、さしずめ後者による佛教哲学史といえようか。
尚、この書に、彼の前記学問的態度が貫かれていることは、J.
W. de Jong の指摘するところでもある。哲学的学解の領域に
とどまらず、つねに実践面にも大きな関心を向ける彼のこれら
の書物が、佛教啓蒙に大きく貢献している事実を認めぬ者はい
ないであろう。この仕事と並んで忘れてならぬのは、やはり般
若経の原典研究であろう。長年の般若経研究の成果の一つとし
て、最近 *Materials for a Dictionary of the Prajñāpāramitā
Literature* 1967 が出た。

Philologist, F. Edgerton が網羅⁽⁹⁾しきれなかった the techni-
cal vocabulary of the Mahāyāna を補正集大成した佛教辞典
の編さんを大きな念願にしているようにみうけられた。又、彼の
出版リストには次の二つが予定されていた。(a) Dharma as a
Spiritual, Social and Cosmic Force. (Prof. Kuntz's Sym-
posium on 'Order'.) (b) Introduction to: D. T. Suzuki on
Indian Mahāyāna Buddhism (Harper & Row)

彼の講ずる佛教概論の教室はつねに満員であり、その中にヒ
ッピーまがいの男女学生が多数いたのも注目された。演習では
G. Tucci 校訂の *Bhṛavāṅkura* を一九六七年度はよんだ。

今、過去形で叙述する点が多いのは、今期(一九六八年九—
十二月の秋学期)ビザの都合で米国へ帰国できず彼の授業がお
こなわれていないからである。彼の不在は Indic Studies の
存在そのものに暗いかげをなげかけている。一般西洋人には
Theravāda Buddhism と禪の知識しか普及していない実情を
なげき、現代文明の騒音を憂え、そして、⁽¹⁰⁾ "I do not believe in
a clear-cut distinction between 'Eastern' and 'Western'
mentality." と語る彼によって、佛教思想が英語の世界に伝え
られるということは重要な意義をもっていたように思われ、そ
の機会が減することは惜しまれてならない。」

とくに京都の地になじみ深い L. Hurvitz 教授は、同僚から
a walking language machine の異名を付せられている。彼の
深い学識と豊かな語学力は JAS 誌上の鋭い書評の数々に十分

發揮せられた。コロンビア大学へ提出した彼の Ph. D. 論文「智顗 (Chih-i) *An Introduction to the Life and Ideas of a Chinese Buddhist Monk*」については、本誌第二号に掲載された安藤教授の書評に詳しい。最近、労作と評される“The road to Buddhist salvation as described by Vasubhadra”を發表した⁶³。これは、四阿鎔摹抄解(大正25. 1a-15 b)の翻訳研究である。この論文の次の結語が、彼の今後の研究の関心を示唆しているように見える。

Unconsciously, Kumārajīva continued to accept Sarvāstivāda ideas as having sāmyrta relevance, while for him only the Mādhyamika system of thought had pāramārthika validity…… Our next task, then, is to delineate the set of ideas on the subject of Buddhist salvation that Kumārajīva brought to his confrontation with Hui-yüan.

E. Conze の留守の今期、彼は代わってインド佛教概論を講じ、来期は中国佛教概論を講ずる予定である。講読では、一人の学生と「十二門論」を読んでいる。他に日本語の講読を担当中である。

Skt. を担当するのは Edowin M. Gerow 教授である。シカゴ大学で J. A. B. van Buitenen の薫陶に育った。一九六一年に Ph. D. を取得するまでに一九五四—五六年には French を、さらに一九五九—六〇年には Skt. を学び、Paris へ留学し、一九六〇—六一年には Madras へ Skt. を学びに出かけている。その後、the Univ. of Rochester (1962-64), Columbia

Univ. (1963-64) を経て、一九六四年から the Univ. of Washington へ赴任している。また昨年度は American Inst. of Indian Studies の Fellowship を得て Mysore で一年を過ごした。

シカゴへ提出した Ph. D. 論文 “A Glossary of Indian Figures of Speech” は一九六九年度中の the monograph series of the Dept. of Near and Middle East Languages, Columbia Univ. の一として出版される予定になっている。他の二冊は彼の彼の出版物には次のものがある。

- (1) “On the Generation of a Normalized Random Number for Digital Computers”, in *Publications, Institute for Air Weapons Research*, Univ. of Chicago, 1958
- (2) Notes and appendices for S. K. De, *Sanskrit Poetics as a Study of Aesthetic*, Univ. of California Press, 1963
- (3) Articles on classical Indian authors to appear in the *Penguin Companion to World Literature*, 1964
- (4) “Indian Poetics” and “Sanskrit Lyric Poetry”, in *Introduction to Indian Literature*, eds. van Buitenen and Dimock, Asia Society, 1965

- (5) Review, A. C. Banerjee: *Studies in the Brāhmaṇas* JAOS 85-4

Skt. は、初・中・上級の三クラスあるが、初級では W. D. Whitney の *Skt. Grammar* 及び Lanman の *Skt. Reader* を使用している。今年、中級では、はじめて *Raghuvaṃśa* が使用

されたが、学生がついてゆけず *Kathasutisagara* の “*Vetala-pāṇicavimśatika*” に変更、又、上級では *Mahābhāṣya* 及び *Kāśīkā* を最初から読んでゐる。初七名、中三名、上二名の学生がゐる。

昨年、E. Gerow 教授渡印に際し、代わつて Skt. を講じたのは、若き俊英 Luis O. Gómez 氏であつた。Puer. to Ri.co 出身で Yale Univ. に於ち P. Tedesco, J. Rahder 等のちよび Skt. ならびに佛教の学殖を培つた。京都に半年滞在後、現在滞印中であるが、Puer. to Ri.co 大学への就職も決定し、今後の活躍が期待される。

Buddhist Studies の Associated Faculty として、中国関係で Hellmut Wilhelm, Fang-kuei Li, Anthropologist として Ganath Obeyesekere、チベット語関係で Turrell V. Wylie の他 Kunga D. Labrang, Nawang L. Norrang の二人のチベット人がゐる。

T. V. Wylie 教授は、もと中国語の専攻者であつた。それが実際にチベット語の研究に専念するようになったのは、一九五五—五七年にわたつて G. Tucci のもとで研鑽をつんでからのことである。G. Tucci に「佛教を知らずしてチベット文献はよめなむ」といわれて以来、佛教に関心をよせるようになったと自ら語る。が、現在までのところ、佛教に関する論文は少ない。以下にこれまでの彼の業績を紹介しておく。

著作

- (1) “A Place Name Index to George N. Roerich's Translation of The Blue Annals.” *Serie Orientale Roma* vol. xv. 1957
- (2) “The Geography of Tibet according to the ‘Dzam-gling-Rgyas-Bshad.’” *Serie Orientale Roma* vol. xxv 1962⁽¹⁾
- (3) *Tibet: A Political History*. New Haven: Yale Univ. 1967
- (4) “Tibet” (A Chapter on Tibetan linguistics) *Current Trends in Linguistics*. Mouton. 1967⁽²⁾
- (5) “Sectarianism in Tibetan Buddhism” *Bulletin of the Field Museum of Natural History*. Chicago. 1967
- (6) “A Tibetan Religious Geography of Nepal.” *Serie Orientale Roma* (in press)

論文

- (1) “Dating the Tibetan Geography ‘Dzam-gling-rgyas-bshad Through Its Description of the Western Hemisphere.” *Central Asiatic Journal*. vol. iv, 4. 1959⁽³⁾
- (2) “Nature in Tibetan Poetry” (in Chinese Translation). *Wen-hsueh-tsa-chih*. vol. 6, 5. 1959
- (3) “A Standard System of Tibetan Transcription” *Harvard Journal of Asiatic Studies*. vol. 22. 1959⁽⁴⁾
- (4) “Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet by Alfonso Ferrari. Completed and edited by

Luciano Petch and Hugh Richardson. (*Serie Orientale Roma xvi.*) "Harvard Journal of Asiatic Studies. vol. 22. 1959 (Review)

(5) "O-Id-spu-rgyal and the Introduction of Bon to Tibet." *Central Asiatic Journal*. vol. viii, 2. 1963

(6) "Mar-pa's Tower: Notes on Local Hegemans in Tibet." *History of Religions*. vol. 3, 2. 1964

(7) "A Propos of Tibetan Religious Observances." *JASOS* vol. 86-1. 1966 (Review)

その他、*Encyclopaedia Britannica* 及び *Encyclopaedia International* のチャートに関する記述は、ほとんど彼の筆になる。彼の講義の *Literary Tibetan* の第一年度のクラスでは H. A. Jaschke の *Tib. Grammar* を用いる。文法事項の説明ならびに巻末の練習問題を一学期間ですませ、あとは、歴史、伝記、年代記からの Selected Readings に向かう。第二年度のクラス、今年度は、*Ras-chung-pa* 作といわれる *Mi-la-ras-pa* の伝記をよんでいる。今年、第一年度のクラスには九名、第二年度には二名の学生がいる。

Sa-skye-pa のラフ Kunga D. Labrang 師は、目下 T. V. Wylie, L. Hurvitz 教授の tutor 的存在である。英語が通じぬため、直接、師から学ぶ機会に恵まれないのは残念である。目下、佛教概論をまとめつつあり、いずれ T. V. Wylie 教授の英語をもって出版されるだろう。

Colloquial Tibetan は Dge-lugs-pa の Nawang L. Norngang 氏が担当している。彼は Lhasa に生まれ、九歳で Drags-po にある Bshad-sgrub-gling Monastery に入り、二〇年近くそこで学習し Dge-bshes の学位を得た。彼の助力によって口語チベットのテキスト *A Manual of Spoken Tibetan (Lhasa Dialect)* はできた。彼の第一年度のクラスは、pattern practice を主とした特別のテキストを用い、第二年度に右のテキストを用いる。今年、第一年度のクラスには七名、第二年度には三名の学生がいる。

因みに Seattle に住むチベット人は、Sa-skye-pa が三人のラフを含め十七、Dge-lugs-pa は十一名で計二十八名である。

歴史の浅いこと、前述の如く主任教授 E. Conze の身分不確定、等々で、この *Indic Studies* について前途を展望することは不可能である。佛教という狭い領域についても、種々な面からのアプローチが可能であろう。その内この大学で学びうると思われる方法論は、梵・藏・漢・巴といった言語を駆使しての従来の原典研究であろう。しかし、その方法論をとりうる学生が出てくるとしてもまだ相当の時間を要するようになる。

ただ、T. V. Wylie のチベット史、N. Poppe の蒙古語の影響、さらにはチベットの学僧の存在をいかして、未知の分野の多いチベット佛教乃至中央アジアの佛教への研究が本格的になされるようになるとすれば、相当な成果が生ずることを期待してもいいのではなからうか。現在、Chinese, Tibetan, Mongol-

lian 研究者が集まって Inner Asian Project をつくっているが、関心は佛教にはないようであり、又、共同研究の体制にはまだ到っていないようである。

註に記した如く、州立大学での Non-Western Civilization Studies なるものが、政治情勢を反映して国家の援助のもとにおこなわれている現状では、佛教をふくめて古代インドの哲学、文学、歴史等への関心がうすいのはやむをえない。しかし、この大学の現状が、米国全体のそれであると考えてならないことはいうまでもない。

注目すべきは、東洋の言語を学ぶ際の徹底した教授法である。Non-Western Civilization Studies を志すものにとって、それら地域の原語に精通することが必須であることは当然である。少なくとも一年間はかならず口語の訓練を課せられる。逆に、課することができる陣容、施設がととのっているといえよう。毎日一時間—intensive コースの日本語の如きは一日六時間—かならず口語のクラスがある。毎日の宿題、毎週末の Vocabulary Quiz 等々、学生は徹底的にしほられる。こうして一応原語をこなせるようになってはじめて、自己の専門へと向ってゆく。当然のことながら言葉の習得なくしては、哲学も歴史も文学もないのである。彼らが、中国語を日本語を話し読む光景に接し、おどろく方が時代錯誤なのであろう。

チベット語研究は、一義的には文法及び辞書編纂に向けられ、また文献学的にもそれはとくに佛教文献の翻訳のための補助手段であったことは否めない。音韻論等の純粋な言語学の領域は

発達しなかった。その原因は八世紀以後のチベットの歴史は佛教史ともいわれ、従って、言語が基本的には佛教伝播のための手段とみなされていた事情にあったといえよう。ところが、一九五一年の中共のチベット侵入、それにつづく五九年のチベットの反乱、ダライラマのインド逃亡といった政治的事件が、本格的なチベット語研究へと拍車をかけることになった。政府ならびにロックフェラー財団の援助のもとにチベット避難民が、世界の数ヶ国に招かれ保護を受け、學術活動を助けることになった。この Dept. がチベット人を抱えるのもその結果に他ならない。主任教授 T. V. Wylie のこれまでの関心からみても、このチベット語講座が、佛教文献理解のためのものでないことは明らかであり、その点にこの特色があり、今後、いわゆる Tibetology の貴重な場として発展することが期待できそうである。これに関連し、一九六七年 Indiana Univ. に事務所をおきその活動をはじめた The Tibet Society, INC. のこと、米国内八つの大学でおこなわれているチベット学²⁴、ならびに、故 G. N. Roerich (The Blue Annals の訳者) の影響下のもと多くの業績をあげつつあるソ連のチベット学²⁴にも、我々は今後注意を怠ってはならないであらう。

(一九六八年、一二月末)

註

(1) *を付したものは大学院生対象の授業があるもの。

(2) 一握りの私立大学においてのみ講ぜられていた Non-Western Civilization Studies なるものが、州立大学にも

おこなわれるようになったのは、戦後のことであり、その発展にはいわゆる G. I. Bill が大きな役を果たした。平和が訪れるとそれへの関心の程度はうすらいだが、米国がはじめて直接中共と戦った朝鮮事変を機にその必要性が叫ばれた。しかし、なんといいまでもその学問の重大性を一種の危機感をもって認識したのは、実は、ソ連によるスプートニクの打上げの成功（一九五七）によるショックからであった。この成功が米国に第二の教育革命をもたらしたともいわれ、翌年、連邦政府は直ちに「Crash Program」をつくった。このプログラムの重点は、「科学と外国語」におかれた。政府は「具体的な援助策」として The National Defence Educational Act (N. D. E. A.) なる特別条例を設け全面的に援助の手をのびた。追いつけ追いつけのかけ声と共に、「科学」面の目標国がソ連であり、「外国語」が共産国家のそれを主な目標としたことはいままでもない。「外国語」に関しては、次の六ヶ国語を「Languages which Americans as a people should know and yet had not learned well」に指定し、これらを学ば有能な学生には授業料、生活費等凡てをまかなうことのある NDEA Fellowship を出した。Chinese, Russian, Japanese, Arabic, Hindi, Portuguese, 「やむを」ない、たのぢのちうな事情を反映してゐると思ふからいふべき。

Cf. Richard F. S. Yang: "Chinese Studies in America."

The Asian Student Nov. 2, 1968

- (3) 鈴木大拙博士頌寿記念会刊「佛教と文化」p. 24, *Eastern Buddhist* New Series 2-1 p. 84-85

- (4) E. Conze: 30 *Years of Buddhist Studies*, (Cassier, 1967) p. 213
- (5) *ibid.* p. 22
- (6) 因みに彼自身の出版リストによれば、一九六七年までに刊行本十八冊、論文九〇、書評一五七編があげられている。
- (7) *JAOs* vol. 80-3 p. 256
- (8) *Indo-Iranian Journal* vol. x, 2-3, p. 215
- (9) E. Conze: *ibid.* p. 16
- (10) *ibid.* p. 21
- (11) E. Conze: *Buddhist Thought in India*, pp. 7-8
- (12) E. Conze: 30 *Years of Buddhist Studies*, p. 213
- (13) *JAOs* vol. 87-4
- (14) これは一九五八年に The Univ. of Washington から提出した彼の Ph. D. 論文の出版である。Bla-ma, Btsan-po (別名 Smin-grol No-non-ban) 作の地誌 (*Dam-Gling-Rgyas-Bshad*) (これの製作年時については註(9)参照) にちみたるチベットに関する部分のテキスト及び翻訳である。一四六枚からなるこの地誌は、世界の次の諸地域について叙述しているが、そのうち四六枚のチベットに関するものがその中心をなす。Nepal, India, Tibet, China, Africa, The Middle East (Arabia, Persia, etc.), Tartary, Europe, Arctic Ocean, North America, South America, Caribbean (Cuba, Puer. to Ri-co, etc.), Shambhala. 地表「気候」動植物群の分布と云々た *Physical Geography* が学問としてとりあげられなかったチベットでは、*Geography* といふべき *Political Geography* と *Religious Ge-*

ography のことである。そして、後者は、巡礼地へのガイドブックの役割を果たした。その巡礼地に関連して、重要人物、出来事伝説等が付記されている故に、重要な資料となる。cf. T. V. Wylie: "The Tibetan Tradition of Geography", *Bulletin of Tibetology*. Vol. II-1, 1965

尚、この地誌のチベットに関しては、以前に左の如き翻訳があった。彼の研究は、依用した Dbu-me 字体のテキストの G. Tucci 私蔵のものとの整合もなされており、中国資料との対照、膨大な注、索引とともに完璧な体裁を整えている。

S. C. Das: *A Brief Account of Tibet from 'Dsam Ling Gyeshe'*, Calcutta, 1887 V. Vasil'ev: *Geografiya Tibeta*, St. Petersburg, 1895

- (15) これはチベット語研究に関する Bibliography である。チベット人自身によるもの、一九五一年以後の中国人によるもの、及び西洋人による研究を一覧して、有益である。尚、この分野のゆらに、Bibliography としつつは次の二つがあげられる。

Eberhardt Richter: *Grundlagen der Phonetik des Lhasa Dialektes*, Berlin, 1964, Robert Shafer (ed.): *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, 2 vols. Wilsbaden, 1957 and 1963

- (16) この論文は、地誌 *The 'Dzam-Gling-Rgyud-Bshad* (註(14参照)の末尾にある簡潔な西半球の説明の部分のテキスト及び翻訳である。この一チベット人の十九世紀の南・北アメリカ大陸及びコロンブスに関する叙述を現在の我々の

知識と対比させると実におもしろい。

尚、この地誌の奥書きに、一八二〇年作とあるにもかかわらず V. Vasil'ev は一八三〇年作と主張した。これに対し、T. V. Wylie はナポレオンのコルシカ島流しの叙述を手がかりにこの書の奥書きの正しいことを証明した。

- (17) チベット語の Transcription は、学者によって全くまちまちであるため、学者自身、印刷者、読者はつねに当惑し、チベット学発展の障害である。たしかに、一つの方法で Orthography 及び Phonology 両方を満足させることは不可能に近い。そこでこの論文で、少なくとも学術出版に際しては次のものを A standard orthographic transcription としつつ採用するよう提案した。ka kha ga nga ca cha ja nya ta tha da na pa pha ba ma tsa tsha dza wa zha za 'a ya ra la sha sa ha a

これは René de Nebesky-Wojkowitz が "Oracles and Demons of Tibet" (The Hague, 1956) で採用しつつあるのと同じである。異なるのは、"Internal lexicographic capitalization" を否定している点である。なんとすれば、"Capitalization" は、チベット語を少しでも知っている人には必要であり、又、全然知らない人にとっても、発音及び辞書を引く際にそれほど価値あるものではないからである。

- (18) ボン教は、第九王 'Spu-lde-gung-rgyal の統治の世に、Zhang-zhung からチベットへもたらされたといくつかの史料がかたる。しかしながら、佛教がチベットへ入る以前から或いは又、佛教側の伝説上の第一王がインドから到着

する以前にすでにボン教が存在していたということも、史料的に明らかである。それでは何故、ボンのチベット入りが、第九王の時とされたのか、これについて仮説を与えたのが本論文である。

佛教徒の系図学者は、チベットの第一王はインドからきたと信じ、現存のチベット王室の系図にインド人をしてその祖先にした。しかし、伝統的な第一王と、ボン教との接触の事実とは文化史上立証される故変えることはできなかった。即ち、かれら系図学者は、佛教到来以前の王室の祖先と信じられている 'O-ide-spu-rgyal (ボン教側の伝統では 'O-ide-gung-rgyal) に 'Spu-ide-gung-rgyal という名を与え、第九位においてしまった。ボン教と土着の第一王との接触を変えることを好まない彼らは、従って、第九王 'Spu-ide-gung-rgyal 統治の世にボン教は伝えられた、と主張せねばならなかった。第九王の 'Spu-ide-gung-rgyal という名は、土着の第一王の伝統名 'Od-ide-spu-rgal とボン側に伝えられる第一王の 'O-de-gun-rgyal とを組合せであろうと推定している。

そして、この第九王が一体だれであるか、即ち、第八王の子供のどの人物であるかについて、Bacot 及び Toussaint の見解を否定するのが、本論文の前半である。即ち Tun Huang 資料にもとづいて Bacot 等は、第八王には二人の子供がいて、そのうちの 'Sa-khyi が第九王になったとした。しかし、資料にみられる lag so 及び ni という二つの言葉の読解を手がかりに第九王は 'Sa-khyi ではなく、'Nya-khyi であるとした。尤も、他の資料によれば、第八

王には三人の子供 (Sha-khri, Nya-khri, Bya-khri) がいて、その中の Bya-khri が即位したという。

(19) 一〇四二年に Atiśa が到着し、十一世紀末には佛教に三つの分派が生じた。そのうち、Bka'-rgyud-pa をひきいた Mar-pa について、史書は、彼がインドへ留学したこと、Naropa のもとで学習したこと、Mar-pa の高弟が Mi-la-ras-pa であること、高僧でありすぐれた翻訳官であった等々、宗教面での偉大な存在であったことを強調する。それに対し、この論文は、Mi-la-ras-pa の伝記をもとに、Mar-pa が宗教面だけでなく、政治面にも多大な関心を寄せた人物であったことを明らかにし、もって The Local Hegemonic Period (中央統一政府が存在しなかった A. D. 842-1247 を意味する) の実態を理解する一手がかりを与えんとした。

その一つの具体的な事件として、彼による 'Stras-mkhar-dgu-thog と 'Mar-pa の息子のための九階だての城塞の建設を問題にしている。この城塞は、半ば構築してはくずすといふことを三度もおこなひ、結局、要地 'The Gas River の峡谷に建設された。この点に、隣近の支配者 (Pha-shan) の眼をくもらせ、その要地の支配権を得んとする Mar-pa の政治的意図をみることで、論文は結論を下している。

(20) Monk と Lama とは、内容上大きな相違があるにもかかわらず、西洋人にはそれらが同一視され誤解されているとチベット人は指摘する。Lama (Bla-ma) は Skt. の Guru, Uttara に相当し、宗教儀式を司る人がとくに含意

されていて、化身でなければ、Lamaとはよはれないと彼らはいう。

チベットへ佛教が到来する以前に、Lamaは、Preceptor又は Priest のいみで用いられ、又ボン教でも Priest の意味であった。従って、佛教到来に際しても、Guru に対してそれを適用すれば足りたわけで新造語の必要はなかった。歴史的に初めて、*“Lama”* が *Thonmi Sambhota* によって用いられたとき、それは彼の師事した Indian Masters を指したといわれる。その後、Buddhist Priest の意味で用いられたのは *Padmasambhava* に対してが最初とされる。

cf. N. C. Sinha: “The Lama,” *Bulletin of Tibetology*, vol. III, 3, 1966

- (21) Kun Chang and Betty Shefts: *A Manual of Spoken Tibetan*, Seattle, 1964

この本は T. V. Wylie 教授の監修、N. D. E. A. の財政的援助のもとに、近代の言語学の方法論を用いてできあがった口語教本である。

- (22) Mongolian の大家 N. Poppe は、昨年度で定年退官し、後任として東京から岡田英弘氏がむかえられた。N. Poppe

は、定年直前 *The Twelve Deeds of Buddha* (Otto Harsowitz, 1967) を出版した。この書は、チベット語から蒙古語へ訳された *The Lalitavistara* のテクストならびに翻訳研究である（但し、チベット語テクストは未発見）。*Sa-skya* の蒙古人 *Nesrab Senge* によるこの蒙古訳は、三巻から成っていたはずであるが、その第二巻のみが保存されており、それは E. Foucaux 訳の Chap. xiii-xxi に相当するところ。

- (23) Harvard 大学を中心とした米国のインド学の動静については次のものを参照。

服部正明「Harvard のインド学雑誌」（インド学試験集 Nos. 4-5）

- (24) cf. Jean M. Perrin: “Recent Russian Studies on Tibetology” (*Bulletin of Tibetology*, Vol. I, 2, 1964)

〔付記〕 E. Conze 教授からの一月八日付私信で次のことが伝えられた。London のアメリカ大使館がビザの交付を拒否しており、米国の帰国の見通しはならぬ。The Univ. of Lancaster の Visiting Prof. をこころめるかなむら Gilgit 本 *Ashtadasharika* を校訂中とのことである。